

## 第二次世界大戦前，シンガポールにおける華人方言 集団の居住パターン

|          |   |
|----------|---|
| 著者       | 山下 清海   |
| 雑誌名      | 筑波大学人文地理学研究   |
| 巻        | 7   |
| ページ      | 27-52   |
| 発行年      | 1983-03   |
| その他のタイトル | The Residential Pattern of Chinese Dialect Groups in Singapore prior to World War ?   |
| URL      | <a href="http://hdl.handle.net/2241/00151069">http://hdl.handle.net/2241/00151069</a> |

# 第二次世界大戦前，シンガポールにおける 華人方言集団の居住パターン

山 下 清 海

- |                      |                         |
|----------------------|-------------------------|
| I はじめに               | Ⅲ-3. 1890年頃の居住パターン      |
| II シンガポールの華人と華人方言集団  | Ⅲ-4. 1940年頃の居住パターン      |
| II-1. 多民族社会における華人    | Ⅲ-5. 華人方言集団の居住パターンの特色   |
| II-2. 華人方言集団の分類      | IV 華人方言集団の居住パターン形成の背景   |
| II-3. 華人方言集団の会館と廟    | IV-1. 華人方言集団の移住の経緯      |
| III 華人方言集団の居住パターン    | IV-2. 華人方言集団のアーバン・ヴィレッジ |
| III-1. 開港直後の居住パターン   | IV-3. 華人方言集団の経済活動       |
| III-2. 1850年頃の居住パターン | V むすび                   |

## I はじめに

本研究は、東南アジアの都市の居住パターンに関する一つの研究である。東南アジアの多くの都市は、多様な民族集団から形成されてきた。それらの都市の居住パターンをみると、さまざまな民族集団の集中地区がモザイク状のパターンを形成してきた<sup>1)</sup>。今日においても、そのようなパターンは、多くの都市で依然として、かなり明瞭に認められる。とりわけ、都市における華人の集中は顕著であり<sup>2)</sup>、シンガポール、マレーシア、インドネシアなどの都市の伝統的な中心部は、全体としてチャイナタウンの様相を呈していると言っても過言ではない。東南アジアにおいて、経済発展のみならず、都市形成においても、華人が果たしてきた役割は、非常に大きい。東南アジアの都市における華人の居住パターンについては、McGee<sup>3)</sup>、Jackson<sup>4)</sup>、McTaggart<sup>5)</sup>などの研究がある<sup>6)</sup>。

東南アジアの華人社会は、いくつかの方言集団から構成されているが、華人の居住パターン形成の考察において、各方言集団の居住パターンの差異に着目することは重要な視点であろう。シンガポールのように、全人口に占める華人の割合が極めて高い都市では、華人社会内部の多様性の意義は、いっそう大きくなる。そこで本研究では、華人の居住パターンの形成を、方言集団レベルで論ずることにする<sup>7)</sup>。

都市内部における華人方言集団の居住パターンについての従来の研究は、非常に乏しい。その最大の原因は、都市内部における華人方言集団の人口分布に関する統計が、ほとんど入手できなかったことであろう。しかし、Hodder は実態調査によって得たデータに基づいて、シンガポールの都心部において、華人方言集団が特定の地区に集中居住していることを、地図に示した<sup>8)</sup>。Hodder が明らかにした華人方言集団の居住パターンは、1952年当時のものであり、それ以前の状況については、いまだ十分に明らかにされていない。また、華人方言集団のそのような居住パターンが、いかにして形成

されたかについて、Hodder は十分な分析は行っていない。Cheng は、華人方言集団に焦点をあてて、シンガポール華人の社会地理学的研究を行ったが、華人方言集団の居住分布に関しては、ほとんど Hodder の研究成果に依存している<sup>9)</sup>。

以上の従来の研究をふまえて、本稿では、1819年の開港から第二次世界大戦に至るまでのシンガポールにおける華人方言集団の居住パターンを明らかにし、そのような居住パターンが形成された背景について考察することを目的とする<sup>10)</sup>。

前述したように、第二次世界大戦前における華人方言集団の居住パターンを明らかにする統計データは欠如している。そこで、華人の強い地縁的、血縁的結びつきに着目し、華人会館の分布を、華人方言集団の居住パターンを反映する重要な指標としてとりあげる。また、補足的に華人の廟の分布も参考にする。まず、華人会館および廟を、華人方言集団の系統別に分類し、それらの位置を現地調査と文献資料<sup>11)</sup>によって確認し、時期ごとに分布図を作成する。ただし、華人会館と廟のうち、特定の方言集団に属さないものは除外する。そのようにして形成された分布図の分析と文献資料、華人会館などでの聞き取りから、当時の華人方言集団の居住パターンを明らかにするように努める。そして、華人方言集団の移住の経緯、集中地区の構造や機能、経済活動などに注目して、それらの華人方言集団の居住パターンが形成された背景について考察する。なお、現地調査は、1978年11月から1980年11月まで約2年間にわたって行い、とくに華人会館での聞き取り調査と資料収集に重点をおいた。

## II シンガポールの華人と華人方言集団

### II-1. 多民族社会における華人

シンガポールは、典型的な多民族社会である。その社会は、華人、マレー人およびインド人（現在

第1表 シンガポールにおける民族構成の推移（1824～1939年）

| 年    | 華 人     |      | マ レ ー 人 |      | イ ン ド 人 |      | そ の 他  |     | 合 計     |       |
|------|---------|------|---------|------|---------|------|--------|-----|---------|-------|
|      |         | %    |         | %    |         | %    |        | %   |         | %     |
| 1824 | 3,317   | 31.0 | 6,431   | 60.2 | 756     | 7.1  | 179    | 1.7 | 10,683  | 100.0 |
| 1830 | 6,555   | 39.4 | 7,640   | 45.9 | 1,913   | 11.5 | 526    | 3.2 | 16,634  | 100.0 |
| 1836 | 13,749  | 45.9 | 12,538  | 41.8 | 2,932   | 9.8  | 765    | 2.5 | 29,984  | 100.0 |
| 1840 | 17,704  | 50.0 | 13,200  | 37.3 | 3,375   | 9.6  | 1,110  | 3.1 | 35,389  | 100.0 |
| 1849 | 27,988  | 52.9 | 17,039  | 32.2 | 6,284   | 11.9 | 1,580  | 3.0 | 52,891  | 100.0 |
| 1860 | 50,043  | 61.2 | 16,202  | 19.8 | 12,973  | 15.9 | 2,516  | 3.1 | 81,734  | 100.0 |
| 1871 | 54,572  | 57.5 | 26,141  | 27.6 | 10,313  | 10.9 | 3,790  | 4.0 | 94,816  | 100.0 |
| 1881 | 86,766  | 63.0 | 33,012  | 24.0 | 12,086  | 8.8  | 5,858  | 4.2 | 137,722 | 100.0 |
| 1891 | 121,908 | 67.1 | 35,956  | 19.8 | 16,009  | 8.8  | 7,727  | 4.3 | 181,602 | 100.0 |
| 1901 | 164,041 | 72.1 | 35,988  | 15.8 | 17,047  | 7.8  | 9,768  | 4.3 | 226,842 | 100.0 |
| 1911 | 219,577 | 72.4 | 41,806  | 13.8 | 27,755  | 9.1  | 14,183 | 4.7 | 303,321 | 100.0 |
| 1921 | 315,151 | 75.3 | 53,595  | 12.8 | 32,314  | 7.7  | 17,298 | 4.2 | 418,358 | 100.0 |
| 1931 | 418,640 | 75.1 | 65,014  | 11.6 | 50,811  | 9.1  | 23,280 | 4.2 | 557,745 | 100.0 |
| 1939 | 569,280 | 77.1 | 80,428  | 10.9 | 60,033  | 8.1  | 28,818 | 3.9 | 738,559 | 100.0 |

資料：Saw, S. H. (1970) : *Singapore : population in transition*. University of Pennsylvania Press, Philadelphia, p. 57.

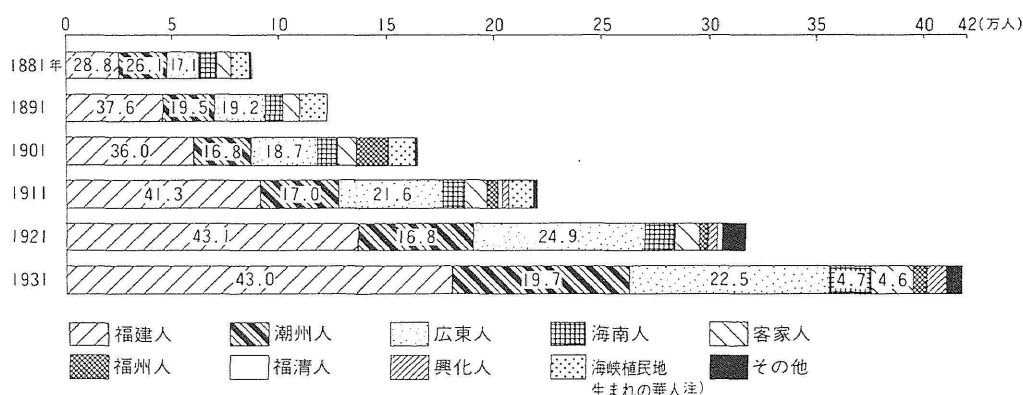
1939年のみ、張礼千（1941）：新加坡人口之演進。南洋学報，2—1，115～125による。

のパキスタン、バングラデシュ、スリランカ出身者も含む)の三つの主要な民族から構成されてきた<sup>12)</sup>。中でもシンガポールでは、全人口に占める華人の割合が、極めて大きかった(第1表)。開港(1819年)直後は、当時オランダ領であったマラッカのマレー人がシンガポールに多数来住し、マレー人が最大多数を占めていたが<sup>13)</sup>、1830年代中頃より、華人が最大の民族集団となった。そして1921年以降、全人口に占める割合は70%以上に達した。

シンガポールに流入した華人数をみると、1881年から1913年まで、全体として増加傾向にあった。1913年には、その1年間に約25万人の華人が来住した。その後10年間は、第一次世界大戦とその後の不況により、華人来住者数は減少した。しかし、1924年から1930年まで再び増加傾向になった。1927年に流入した華人人口は、開港以来最高の約36万人に達した。しかし、世界恐慌によりマレー半島の多くの錫鉱山とゴム園は閉鎖され、さらに植民地政府の移民制限も加わって、1930年代前半は華人来住者数が減少したが、1930年代後半、華人女子の移住が増え、華人移民数はやや回復した。1937年の華人流入者数は約24万人であった。その後、1938年5月から華人女子の移民制限が始まり、第二次世界大戦の勃発まで、華人移民の数は、10万から16万人前後であった<sup>14)</sup>。1939年のシンガポールの人口は74万人にのぼり、そのうち華人は57万人で、全人口の77.1%を占めた<sup>15)</sup>。

## Ⅱ-2. 華人方言集団の分類

シンガポールへの華人移住者の大部分は、福建・広東両者を中心とする華南出身者であった。それら華人の出移住地域で話される華南の方言は、互いに大きな差異があり<sup>16)</sup>、華人は、彼らが通常用いる方言によって、いくつかの集団に分けられる。このような集団を方言集団(dialect group)とよぶ。異なった方言集団間では、共通語がない限りコミュニケーションは容易でない。



第1図 シンガポール華人方言集団の人口構成の推移(1881~1931年)

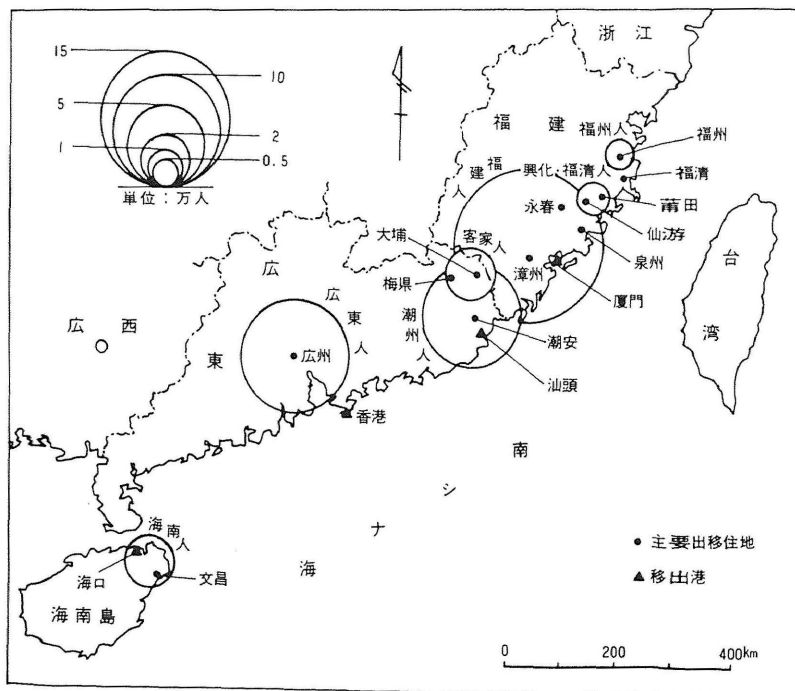
グラフ内の数字は、華人全体に占める割合(%)を示す。

資料: Vlieland, C. A. (1932): *British Malaya, a report on the 1931 census of population and on certain problems of vital statistics*, The Crown Agents for the Colonies, London, p. 181, 満鉄東亜経済調査局編(1941):『英領馬來・緬甸及濠州に於ける華僑』満鉄東亜経済調査局, 東京, p. 61, 張礼千(1941):新加坡人口之演進, 南洋学報, 2-1, 115~125, 張礼千(1941):1921年新加坡人口統計表, 南洋学報, 2-2, 184~185.



第二次世界大戦前の華人方言集団の人口構成の推移をみると、第1図のように示される。1881年の海峡植民地の統計によれば、華人総数86,766人のうち、福建人が28.8% (24,981人)、潮州人が26.1% (22,644人)、広東人が17.1% (14,853人)を占めた。それらに次いで、海峡植民地生まれの華人が、全華人の11.0% (9,527人)を占めていた。この海峡植民地生まれの華人 (Straits-born Chinese) という分類は、1911年の人口センサスまで存在したが、その大部分は、マラッカから移って来た福建省の漳州および泉州地方出身の華人とその子孫であり、福建人とみなしてもさしつかえないと思われる。当時、マラッカの華人方言集団の中では、福建人が圧倒的多数を占めていた。19世紀のシンガポール華人社会は、マラッカの華人社会の延長だといえることができる<sup>17)</sup>。第二次世界大戦前から今日に至るまで、シンガポールでは、福建人が最大の華人方言集団の地位を保ってきた。

福建人に次いで第二、第三の方言集団であったのは、潮州人と広東人 (広府人ともよばれる) であった。1901年以後は、広東人の人口が潮州人の人口を上回り、第二の集団となった。第二次世界大戦前には、これら福建人、潮州人および広東人が、三大方言集団であった。これらに次いで、海南人と客家人が、ほぼ同程度の人口を有していた。そのほかの少数方言集団として、福州人と興化人があげられる。1911年、1921年、1931年の人口センサスでは、福清人の分類が設けられているが、福清人は興化人と非常に類似した方言を話し、同一グループとみなすことができる<sup>18)</sup>。



第2図 シンガポール華人方言集団の出移住地域と人口規模 (1931年)

資料: Vlieland, C. A. (1932): *Blitish Malaya, a report on the 1931 census of population and on certain problems of vital statistics*. The Crown Agents for the Colonies, London, p. 181  
および各華人会館発行の『記念特刊』

1931年の人口センサスに基づき、それぞれの華人方言集団の人口規模と出身地を示したものが第2図である。シンガポール華人の98%以上は、福建・広東両省の出身者とその子孫であり、華人移住者は、廈門、汕頭、香港、海口などの華人移出港から船に乗り込み、シンガポールへ到着した。

### Ⅱ-3. 華人方言集団の会館と廟

華人社会では、多くのさまざまな団体組織が形成されてきた。華人によって組織された伝統的な団体は、一般に「会館」とよばれる。華人会館には、大きく分けて、地縁的組織である同郷会館、血縁的組織である同姓会館、そして業縁的組織である同業会館の三種類から成る<sup>19)</sup>。これらの会館の多く

第2表 第二次世界大戦前、シンガポールにおける華人方言集団のおもな会館

| 方言集団  | 同 郷 会 館  | 同 姓 会 館   | 同 業 会 館  |
|-------|--|---|--|
| 福 建   | 福 建 会 館 (1860?)<br>永 春 会 館 (1867)<br>金 門 会 館 (1876)<br>晋 江 会 館 (1918)  | 平陽汪氏公会 (1908)<br>福建楊氏公会 (1915)                                  | 閩南滙兌公会 ( ? )<br>福建建築工業社 (1937)   |
| 潮 州   | 義 安 公 司 (1845)<br>潮 陽 会 館 (1925)<br>潮州八邑会館 (1929)<br>潮 安 聯 誼 社 (1937)  | 鳳廓汾陽公司 (1865)<br>潮州江夏堂 (1866)<br>潮州西河公会 (1879)<br>潮州隴西公会 (1890) | 香 汕 郊 公 局 (1890)<br>布 行 商 務 局 (1908)<br>海 嶼 郊 公 所 (1922)<br>潮 僑 滙 兌 公 会 (1925) |
| 広 東   | 寧 陽 会 館 (1822)<br>南 順 会 館 (1830年代)<br>肇 慶 会 館 (1879)<br>広 東 会 館 (1937) | 曹 家 館 (1819?)<br>四邑陳氏会館 (1848)<br>台山黄家館 (1854)<br>広東吳氏書室 (1910) | 広 幫 猪 肉 行 (1909)<br>広 東 簾 商 公 会 (1910)<br>広 幫 熟 食 行 (1939)<br>広 肇 客 棧 行 ( ? )  |
| 海 南   | 瓊 州 会 館 (1857)<br>瓊崖沙港同郷会 (1936)<br>泰家南旅同郷会 (1937)                     | 符 氏 社 (1887)<br>韓 氏 祠 (1900)<br>瓊崖龍氏公会 (1903)                   | 瓊 僑 咖 啡 公 会 (1934)<br>瓊 僑 滙 兌 公 会 (1939)<br>瓊 南 客 棧 行 ( ? )                    |
| 客 家   | 応 和 会 館 (1823)<br>茶 陽 会 館 (1857)<br>南洋客属総会 (1929)                      | 南洋頼氏公会 (1933)<br>客属黄氏公会 (1941)                                  | 當 商 公 会 (1920)<br>茶陽京菓商務局 ( ? )  |
| 福 州   | 福 州 会 館 (1909)<br>福州瀛州同郷会 (1936)<br>福州長樂公会 (1939)                      | 徐 氏 公 会 (1937)<br>榕 西 公 会 (1939)<br>福州義序黄氏公会 (1939)             | 福州木帮公所 (1912)<br>福州咖啡商公会 (1920)<br>福州商業公会 (1930)                               |
| 興化・福清 | 福 清 会 館 (1910)<br>興 安 会 館 (1920)                                       |   | 自 由 車 商 会 (1932)   |
| 三 江   | 三 江 会 館 (1908)<br>上 海 公 会 (1918)<br>溫 州 会 館 (1923)                     |   | 上海西式女服同業会 (1939)   |

( ) 内の数字は、会館の創立年次。

資料：各華人会館発行の『記念特刊』、呉華（1975）：『新加坡華族会館志第一冊』、南洋学会、シンガポール、199p.、呉華（1975）：『新加坡華族会館志第二冊』、南洋学会、シンガポール、221p.、呉華（1977）：『新加坡華族会館志第三冊』、南洋学会、シンガポール、186p. ほか。

は、同一の方言集団に属する華人から構成された。同郷会館が同一方言集団の華人から構成されるのは当然であるが、同姓会館や同業会館も、実質的には、その構成員が同一方言集団に属する場合が多かった。第2表は、おもな華人会館を示したものである。

本国政府および植民地政府の十分な保護、援助もない状況下で、故郷を遠く離れ、異なった環境で生活しなければならなかった華人にとって、華人会館は、華人の重要な相互扶助機関であった。会館は、会員に職をあっせんし、病人を助け、共同墓地、廟、病院などを建設、管理し、会員相互の紛争を仲介し、華人学校を経営して会員子弟の教育にあたり、成績が優秀な会員子弟には奨学金を与えた。また、生活困窮者や老人には、経済的援助も行った。さらに、会館の建物自体は、会員の親睦の場であり、情報交換の場でもあった。

したがって、一般に会館は、できるだけ会員が多く居住する地域に設立された。すなわち、同一方言集団から構成される会館は、その方言集団が集中して居住する地区に建てられた。なぜなら、大部分が下層階級に属する華人にとって、会館を訪れるのに交通費を払ってまで行く余裕はなかったからである。それゆえ、華人方言集団の会館の分布は、それら方言集団の居住分布を非常によく反映していたと言える。

一方、華人は出身地域で日常信仰していた神を、移住地域でも祀った。そして、華人は同一方言集団が多く居住する地域やその近くに、廟を建立した。しかし、廟の設立場所は、風水説にのっとって決定されたため、廟の中には、恆山亭<sup>20)</sup>のように華人居住地域のはずれに設立されるものもあった。特定の華人方言集団が設立したおもな廟とその主神<sup>21)</sup>を示すと、第3表のようになる。

第3表 シンガポールにおける華人方言集団のおもな廟

| 方言集団 | 廟                | 主 神           |
|------|------------------|---------------|
| 福 建  | 恆 山 亭 (1828)     | 大 伯 公         |
|      | 天 福 宮 (1820年代)   | 天 后 聖 母       |
|      | 金 蘭 廟 (1830)     | 清 水 祖 師 (祖師公) |
|      | 鳳 山 寺 (1836)     | 広 沢 尊 王       |
| 潮 州  | 粵 海 清 廟 (1820年代) | 天后聖母および玄天上帝   |
| 広 東  | 広 福 古 廟 (1835以前) | 齊 天 大 聖       |
| 海 南  | 瓊 州 天 后 宮 (1857) | 天 后 聖 母       |
| 客 家  | 丹戎巴葛福德祠 (1844)   | 大 伯 公         |

上記のほか、客家人と広東人が共同して設立したものに、海唇福德祠(1820年頃創設、主神は大伯公)がある。( )内の数字は、廟の創立年次。

資料：林孝勝ほか(1975)：『石叻古蹟』南洋学会、シンガポール、261p.、各種華人会館発行の『紀念特刊』および現地調査。

以上述べてきたように、華人方言集団によって設立された会館や廟の位置は、華人方言集団の人口分布に関する統計が極めて乏しい状況下では、過去の華人方言集団の居住パターンを知る上で、非常に有効な指標となろう。

### Ⅲ 華人方言集団の居住パターン

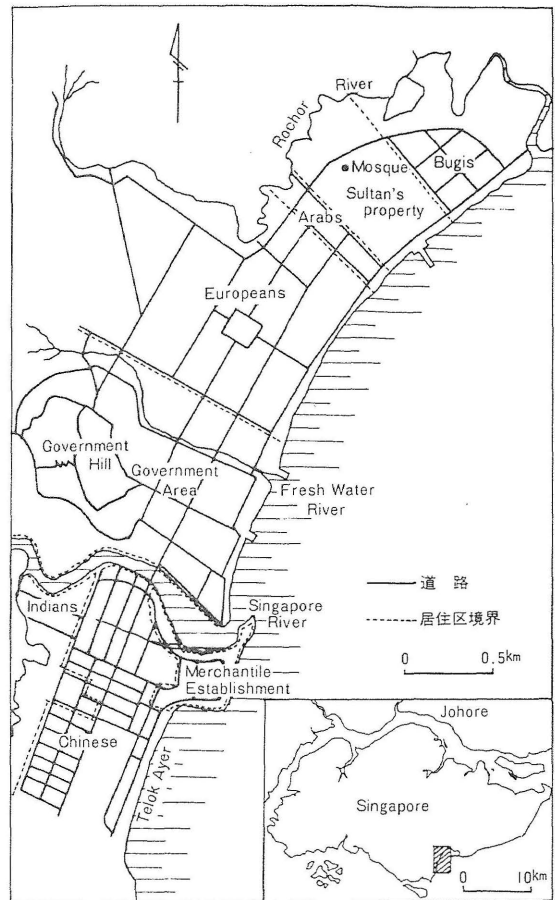
#### Ⅲ-1. 開港直後の居住パターン

スタンフォード・ラッフルズは、オランダとの植民地争奪の過程で、東南アジアの植民地支配および中国への交通路の確固とした新しい基地を求めて、1819年1月29日にシンガポールに上陸した<sup>22)</sup>。こうして、シンガポールは、新しいイギリス植民地として開港された。

ラッフルズは、シンガポールを自由港として開放したため、彼の来港後3カ月で、人口は3千に達し、1820年4月には1万人を越えた<sup>23)</sup>。シンガポールの開港直後に来港した華人は、大部分当時オランダの支配下にあったマラッカから移って来た者で、そのほか当時オランダ領のリアウ(Riau)諸島から来た者もあった。貿易に都合がよいイギリス植民地が建設されたという知らせは、中国本土に直ちに伝わり、1821年2月には福建省の廈門から最初のジャンクが到着した<sup>24)</sup>。

ラッフルズは、新しい都市の建設に力を入れた。彼は、マレー人、ブギス人<sup>25)</sup>、華人、インド人などの民族間における言語、生活様式、職業などの差異を考慮し、互いに混住させずに、それぞれの民族の居住地を指定した(第3図)。居住地の区画の決定にあたってラッフルズは、華人の勤勉な民族性を評価し、常に社会の最大部分を形成すると予想し、まず第一に華人を考慮するようにと、部下に注意を喚起した<sup>26)</sup>。さらにラッフルズは、華人社会内部の出身地の相異による集団の性格の違いに留意する必要を早くから認識していた<sup>27)</sup>。

こうして華人居住区は、シンガポール川の南岸地区(大坡*da po*)に設定された<sup>28)</sup>。商業地区の南側に隣接する Telok Ayer Street



第3図 シンガポール中心部における民族集団の居住区画プラン(1828年)

資料: Turnbull, C. M. (1977): *A history of Singapore, 1819-1975*. Oxford University Press, Kuala Lumpur, p. xvi 所収の地図, Plan of the town of Singapore by Lieutenant Jackson, 1823. および McGee, T. G. (1967): *The Southeast Asian City*. G. Bell and Sons, LTD, London, p. 70.

は海岸に面したメイン・ストリートで、その周辺は開港直後の華人集落の中心地であった。開港2年後の1821年には、福建人の廟である天福宮の前身となる小さな廟が Telok Ayer Street に建立され

た。天福宮は1842年に正式に落成した<sup>29)</sup>。天福宮の周辺には、福建人が多く居住していた。また Telok Ayer Street には、広東人と客家人が共同して海唇福德祠を1820年頃に設立した<sup>30)</sup>。さらに、広東省の嘉応州（梅県、蕉嶺、五華、興寧、平遠の五地方から成る）出身の客家人の同郷会館である応和会館も、1822年に同じ通りに建立された<sup>31)</sup>。

Telok Ayer Street のやや北の Philip Street には、1820年代に潮州人の最初の廟である粵海清廟の前身が設立された。正式には、1852年から1855年頃にかけて建立された<sup>32)</sup>。開港直後、シンガポールに来住した潮州人の多くは、シンガポールの南のリアウ諸島で農業に従事していた者であった。開港直後の潮州人の中心的な居住地域は、粵海清廟周辺からシンガポール川南岸の Boat Quay にかけてであった<sup>33)</sup>。そして、貿易に従事するほか、River Valley Road から Bukit Timah や Thomson Road にかけての丘陵地で、ガンビール（gamiber）とコショウの栽培に従事した<sup>34)</sup>。ガンビールは、化学染料が用いられるようになるまで、重要な染料原料であり、シンガポールの貴重な輸出品であった。しかし、長期にわたるガンビールの栽培は、農地を消耗させ、さらに化学染料の発明による需要の減少のため、1850年代末期から1860年代初期にかけて、シンガポールのガンビール栽培は衰退した<sup>35)</sup>。潮州人のガンビールとコショウの輸出業に携わった商店は、シンガポール川に近い River Valley Road や New Market 付近に集中していた<sup>36)</sup>。

### Ⅲ-2. 1850年頃の居住パターン

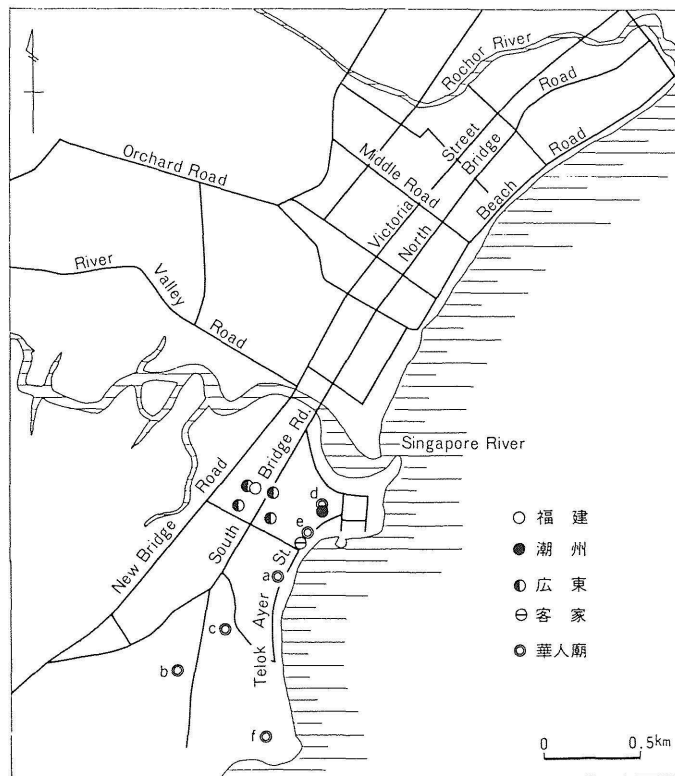
開港から30年後の1849年のシンガポールの人口は、52,891人に達し、そのうち華人は52.9%（27,988人）を占めるようになった（第1表）。1850年当時の華人方言集団の会館および廟の分布をみると、すべてシンガポール川の南岸地区に位置し、北岸地区には立地していなかった（第4図）。ただし、ロチョール川の河口付近の北側には、広東人の創設した広福古廟（1835年以前の設立）が建てられていた<sup>37)</sup>。当時の華人の会館および廟は、福建人、潮州人、広東人および客家人のものに限られ、他の方言集団の会館・廟はまだみられなかった。

主要な会館と廟は、Telok Ayer Street とその周辺に位置していた。ただし広東人の会館は、それらより内陸側の South Bridge Road 付近に建てられていた。広東人の会館が集まっている地区の中に、一つの福建人の会館（長泰会館、1849年設立）が認められるが、これは、当時その地区が広東人と福建人の居住区の漸移地帯であったことを示していると思われる。

会館および廟の位置から、当時の華人集落の中心が、シンガポール川の南岸地区にあったことは明らかである。しかし、シンガポール川の北岸地区（小坡 *Xiao po*）の本来ヨーロッパ人居住区に予定されていた地区にも、当時すでに多数の華人が居住していたと思われる。しかし、1850年頃、北岸地区において華人方言集団がいかなる居住パターンを示していたかについては、明らかではない。

### Ⅲ-3. 1890年頃の居住パターン

1849年に27,988人であったシンガポールの華人人口は、約40年後の1891年には121,908人に達した。これは、全人口の67.1%に相当する。このうち福建人、潮州人および広東人が、それぞれ37.6%、



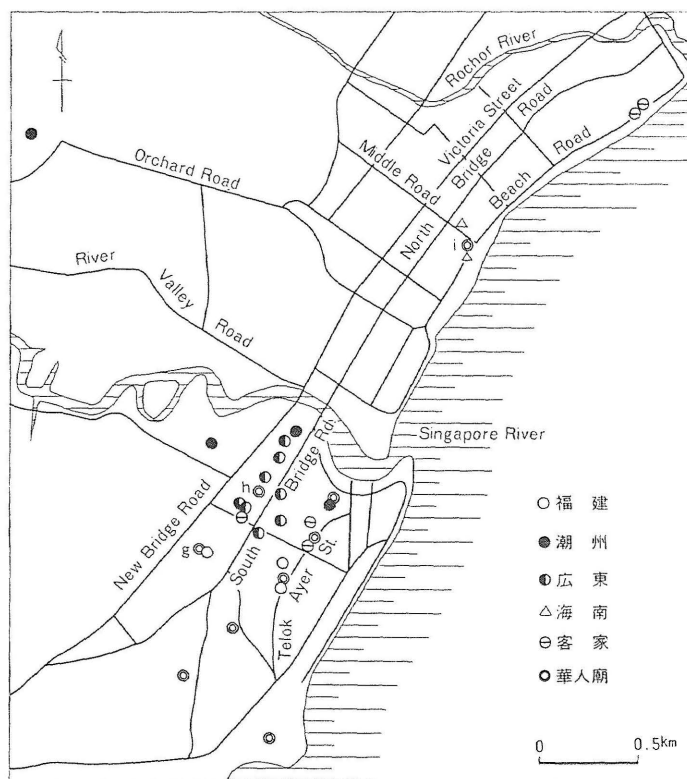
第4図 華人民族集団の会館および廟の分布 (1850年頃)

a: 天福宮 (福建系), b: 金蘭廟 (福建系), c: 鳳山寺 (福建系), d: 粵海清廟 (潮州系), e: 海唇福德祠 (廣東・客家系), f: 丹戎百葛福德祠 (客家系)

資料: 各華人会館発行の『紀念特刊』, 吳華 (1975): 『新加坡華族會館志第一冊』南洋学会, シンガポール, 199p., 吳華 (1975): 『新加坡華族會館志第二冊』南洋学会, シンガポール, 221p., 吳華 (1977): 『新加坡華族會館志第三冊』南洋学会, シンガポール, 186p., 林孝勝ほか (1975): 『石加古蹟』南洋学会, シンガポール, 261p. ほか, および聞き取り, 野外観察による。

19.5%, 19.2%を占め, この三大方言集団だけで, 全華人の約4分の3を占めていた。このほか, 海峽植民地生まれの華人, 海南人および客家人が, それぞれ10.5%, 7.1%, 6.1%を占めていた<sup>38)</sup>。前述したように, 海峽植民地生まれの華人のほとんどを福建人とみなすと, 福建人は全華人の半数近くを占めていたことになる。

植民地政府は, 秘密結社の活動を根絶するため, 1890年に新しい団体登録令を發布した。これにより68団体が登録されたが, このうちの55団体は華人のものであった<sup>39)</sup>。1890年頃の華人会館分布図を見ると, 北岸地区にも華人会館と廟がみられるようになった (第5図)。海南人の最初の会館である瓊州会館が, 1857年に Malabar Street に設立され, 1880年に現在地の Beach Road に移転した。瓊州会館内には, 天后聖母を祀った天后宮が設けられた<sup>40)</sup>。また, 瓊州会館に近い Middle Road に



第5図 華人方言集団の会館および廟の分布（1890年頃）

g: 滄江孚濟廟（福建系），h: 清元真君廟（福建系），i: 天后宮（海南系）

資料：第4図に同じ。

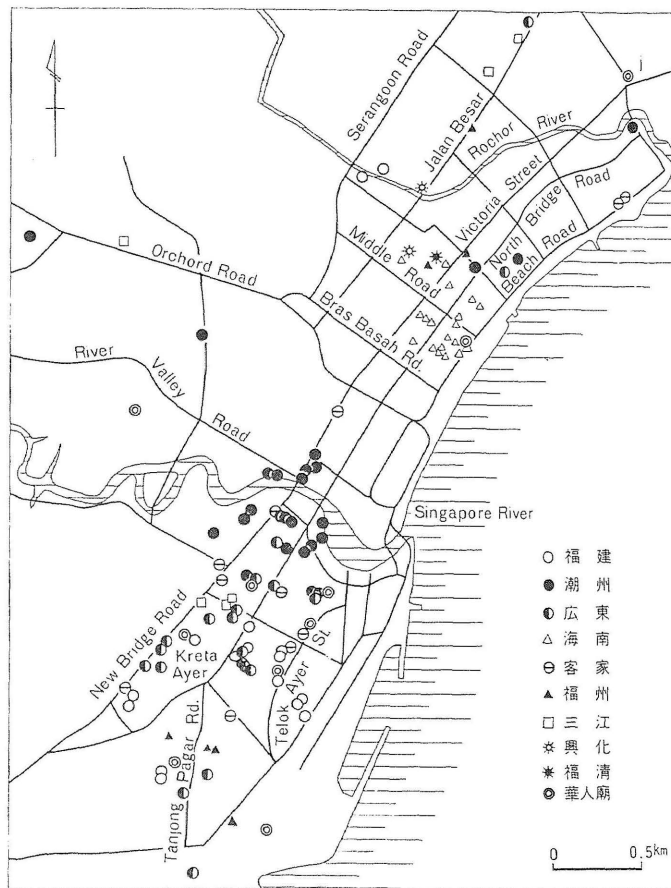
は、同じく海南人の同姓会館である符氏社が、1887年に設立された<sup>41)</sup>。このように、海南人の会館・廟の建設は、福建人、潮州人、広東人および客家人よりも30～40年遅れて、北岸地区に建てられた。北岸地区の Beach Road には、また客家人の豊順会館と三和会館が設立された。

一方、南岸地区においては、福建人、潮州人、広東人、客家人の会館が増加した。とくに広東人の会館が、South Bridge Road や New Bridge Road 付近に多く建設された。

#### Ⅲ-4. 1940年頃の居住パターン

1891年以来、華人人口は順調に増加し、総人口に占める華人の割合は、1901年以後70%を越えるようになった。1939年の人口は、約50年前の1891年の人口の約4.7倍になった。このように華人人口が増大するにつれ、それまでの華人方言集団の居住パターンにも大きな変化が生じた。

1940年頃の華人会館の分布をみると（第6図）、1890年頃に比べて、華人会館の数が大きく増加し、北岸地区にも多くの新しい華人会館が出現した。一部はロチョール川を越えて、その北岸にもみられるようになった。各方言集団の特定地区への集中は、より顕著になった。つぎに、各華人方言集団の



第6図 華方言集団の会館および廟の分布（1940年頃） j: 広福古廟（広東系）

資料：第4図の資料および関楚璞ほか編(1940)：『星洲十年』星洲日報社、シンガポール、929～950。

居住パターンの特色を検討しよう。

福建人の会館は、Telok Ayer Street から South Bridge Road 一帯にかけて集中していた。第4図および第5図と比較すると、福建人の会館の立地が、Telok Ayer Street からさらに内陸側へ広がり、福建人居住区の拡大をみてとることができる。

潮州人の会館は、1890年から1940年の間に急増した。それらは、シンガポール川河口の両岸に集中した。とくにシンガポール川の南岸に多かった。1890年頃の分布図では、シンガポール川の北岸には、潮州人の会館はみられなかったが、北岸地区にも潮州人の会館が設立されるようになり、潮州人居住区の拡大を示している。

広東人の会館は、福建人と潮州人の会館のそれぞれの集中地区よりも、さらに内陸側に多く集まっていた。Kreta Ayer（中国語で牛車水とよばれる）を中心とする South Bridge Road や New Bridge Road の周辺が、広東人の集中地区であった。

海南人も、北岸地区の特定の地区に集中して居住していた。海南人の会館は、天后宮が位置する Beach Road や Middle Road 一帯に集まっていた。しかしながら、依然として、シンガポール川の南岸地区には、海南人の会館は見あたらなかった。



客家人の会館は、南岸地区にも北岸地区にも分布していたが、顕著な集中地区はなかった。強いて言えば、南岸地区の福建人および広東人の集中地区の中に混在して、客家人の会館が立地していた、ということができる。

福州人の最初の会館は、1909年に南岸地区の Club Street に設立された福州会館である。福州人の会館は、南岸地区の Tanjong Pagar Road 付近と北岸地区の Victoria Street 付近にみられた。1920年代から1930年代にかけて、福州人は、北岸地区の New Bridge Road や Tanjong Pagar Road 一帯に多く居住した<sup>42)</sup>。

興化人の最初の会館である興安会館(1920年設立)および福清人の最初の会館である福清会館(1910年設立)は、設立以来数回の移転を行ったが、いずれも北岸地区に建てられた。19世紀末になって興化人の移住が盛んになったが、彼らは北岸地区の Queen Street, Albert Street, Rochor Canal Road 周辺やロチョール川の北岸に多く居住した。

三江人<sup>43)</sup>の会館は、南岸地区の広東人集中地区付近と、ロチョール川を越えて北岸の Jalan Besar にあった。三江人の最初の会館である三江会館は、1908年にロチョール川の北岸の Jalan Ampas に設立された。

#### Ⅲ-5. 華人方言集団の居住パターンの特色

以上行ってきた考察をもとに、つぎに第二次世界大戦前の華人方言集団の居住パターンの特色を検討してみよう。

華人の居住パターンは、開港初期のラッフルズの民族別居住区画プランの影響を強く受けた。まず、シンガポール川の南岸地区の華人居住区に設定された地区から華人の居住が始まった。その後、北岸地区のヨーロッパ人居住区や行政地区にあてられていた地区にも華人が居住するようになった。華人のおもな居住地域は、海岸線より内陸側1～1.5kmの範囲で、華人居住地域は、北東および南東方向に主要道路に沿って発展していった。一方、ヨーロッパ人が多く住むようになった River Valley Road や Orchard Road 方面では、華人の居住は多くなかった。

シンガポール川の南岸地区と北岸地区における華人方言集団の居住パターンには、明確な差異があった。南岸地区は、福建人、潮州人および広東人の三つの主要な方言集団が占拠した。これに対し、海南人や興化人などの少数方言集団の多くは、北部地区に居住した。

多くの華人方言集団は、同じ集団に属する華人が集中して居住する地区を有した。とりわけ著しい集中地区は、南岸地区における福建人、潮州人および広東人の集中地区であった。この三大方言集団は、それぞれの集中地区を中心に、南岸地区を大きく三つの地区にすみわけけるパターンを示した。また、北岸地区においては、海南人の集中地区が顕著であった。その他の少数方言集団の場合、それほど顕著ではないが、いくつかの集中地区があった。興化人と福清人は、北岸地区の Queen Street 付近に多く集中していた。しかし客家人や三江人には、明確な集中地区はみられなかった。

#### Ⅳ 華人民族集団の居住パターン形成の背景

華人民族集団間の方言の大きな差異によるコミュニケーションの困難や、価値観、思考様式、生活様式などの文化的差異の存在、さらにはイギリス植民地政府の対華人政策などは、以上考察してきたような華人民族集団の居住パターン形成の背景にある、基本的に重要な要素である。本章では、前章までの考察をふまえて、華人民族集団の居住パターンが形成された背景について、さらに若干の観点から分析を加えてみることにする。

##### Ⅳ-1. 華人民族集団の移住の経緯

華人民族集団のシンガポールへの移住の時期やその規模には、集団ごとに差異がある。福建人、潮州人、広東人および客家人は、1819年の開港直後から移住を始め、1820年代にはある程度の人口が居住していた。先に述べたように、福建人は開港直後にマラッカから移動して来た。シンガポールに最初に来た広東人は、ラッフルズと伴に、1819年にシンガポールに上陸した曹亜志（広東省台山県人）であった。また、客家人の来港も早く、1823年には、応和会館が設立された。

福建人、潮州人、広東人および客家人を先來集団とよぶことにすれば、それらの集団より遅れてシンガポールに移住して来た海南人、福州人、興化人、福清人、三江人などは、後來集団とよぶことができる。海南人が最初にシンガポールに来たのは、1841年であるといわれる<sup>44)</sup>。シンガポールへの海南人の移住が盛んになったのは、海南島の海口が1876年に貿易港として開港されて以後のことである。

華人民族集団の移住時期の差異は、集団の初期の居住地の選定に大きな影響を与えた。先來集団は、種々の条件に恵まれた土地に居住し、後來集団は、先來集団によってまだ十分に占拠されていない土地に居住した。すなわち、シンガポール川の南岸地区は、先來集団によって占拠され、海南人をはじめとする後來集団は、ラッフルズの都市計画でヨーロッパ人居住区などに割り当てられていた北岸地区に多く居住した。後來集団の人口規模は、先來集団に比べて小さく、先來集団のように広い土地を占拠して大きな集中地区を形成するまでには至らなかった。

ところで、シンガポールへの華人の移住をみてみると、だいたい次のような過程を経てきたといえよう。華人の出身地には、客頭とよばれる移民ブローカーが存在し、客頭は廈門や汕頭のような華人の移出港にある客棧（移民のための旅館）と連絡をとりながら、移民を集めた。廈門には、マニラへの移民を取り扱う「呂宋（ルソン）客棧」とともに、シンガポールへの移住者のための「新加坡（シンガポール）客棧」があった<sup>45)</sup>。

東南アジアへの華人移民は、一般に苦力（シンガポールでは「估厘」ともよばれる）あるいは猪仔（広東方言）とよばれていた。1887年頃のシンガポールの華人移民の状況をみると、廈門や香港から到着する一つの汽船には、400～500人から1,000人ばかりの華人移民が乗っていた。その中には、自分の意志で来た者のほかに、捕えられて来た者も少なくなかった<sup>46)</sup>。

シンガポールに到着した新來者（新客とよばれた）は、親類や友人などの身寄りがない場合、まず

単身の労働者用の宿舎に落ち着いた。そのような宿舎は、猪仔館あるいは估俚間とよばれた。同郷人ごとに、そのような猪仔館が設けられていた。数十人が一軒の建物を借りて、それを猪仔館としていた。福建省の泉州の晋江出身者の猪仔館は、シンガポールだけで50～60軒あった<sup>47)</sup>。新客は、猪仔館に身を寄せて、同郷人の助けを求め、新しい職業を捜したり、あるいはマラヤ各地やインドネシアなどに再移住していった。このような華人の移住過程は、シンガポールに到着後も、同郷人、同一方言集団が、おのずと特定の地区に集中するようなシステムを形成していた。

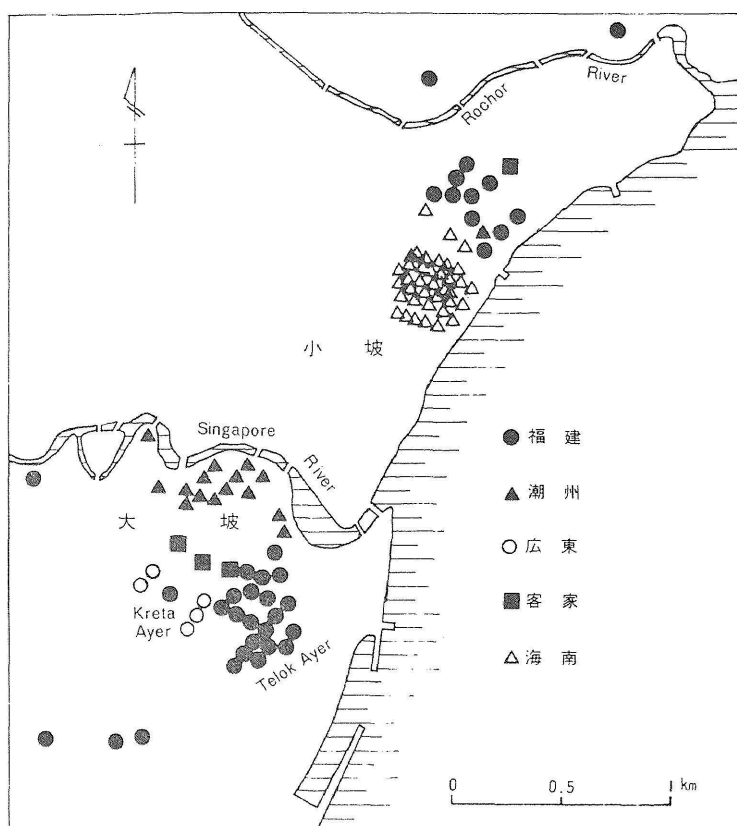
#### Ⅳ―2. 華人方言集団のアーバン・ヴィレッジ

一般に、移民集団の初期の居住地区は、新来の移民集団が新しい環境へ適応するためのクッションとしての役割を果たす。そして、このような地区は新来者を吸引して、それらの集団の居住地域の核となり、すみわけを促進させる<sup>48)</sup>。ボストンの West End のイタリア人地区の事例を研究した Gans は、移民集団が彼らの非都市的な制度や文化を、都市的環境への適応を試みる地区に対して、アーバン・ヴィレッジ (urban village) とよんだ<sup>49)</sup>。このことは、華人方言集団が形成する集団居住地区にもあてはめることができよう。華人移民集団も、本来、福建、広東両省を中心とする農村地域出身者であった。

それぞれ異なった出身地域の文化をもつ方言集団は、シンガポールの新しい環境への適応の過程で、方言集団ごとにアーバン・ヴィレッジを形成していった。それらは、集団によって非常に明瞭なものもあれば、そうでないものもあり、また、アーバン・ヴィレッジの規模も異なっていた。明瞭なアーバン・ヴィレッジを有する集団は、福建人、潮州人、広東人および海南人であった。福建人は Telok Ayer Street 周辺、潮州人はシンガポール川の南岸にそった地区、そして広東人は、South Bridge Road と New Bridge Road にはさまれた Kreta Ayer (牛車水) 周辺が、それぞれの集団のアーバン・ヴィレッジであった。いずれも、シンガポール川の南岸地区に位置した。これに対し、海南人のアーバン・ヴィレッジは、北岸地区の Beach Road, Middle Road 周辺地区にあった。客家人や三江人は、明瞭なアーバン・ヴィレッジを形成しなかった。福州人、興化人、福清人は、小規模であるが、北岸地区の Rochor Road と Queen Street の交界付近がアーバン・ヴィレッジの様相を呈していた。

アーバン・ヴィレッジには、同郷人が集中して居住しており、そこには、同郷会館、同姓会館、同業会館、娯楽・慈善団体などの各種団体、故郷との送金、通信を行う信局<sup>50)</sup>、前述した猪仔館あるいは估俚間とよばれる宿舎、華人の故郷で信仰されていた神を祠る廟、華人学校などが、集中して設けられていた。

第7図は、1940年頃の信局を、方言集団の系統別に分布を示したものである。これをみると、各方言集団の信局は、極めて明瞭に地域的に集中していたことが認められる。その集中地区を、先の会館と廟の分布図と比較すると、非常に類似したパターンを示している。ただし、北岸地区にも福建人の信局が集中している地区があることは、最大の華人方言集団である福建人が、北岸地区にも多数居住していたことを物語っている。



第7図 華人方言集団の信局の分布（1940年頃）（1点1軒）

資料：閔楚璞ほか編（1940）：『星洲十年』星洲日報社，シンガポール，578～590.

このように、各華人方言集団のアーバン・ヴィレッジは、異なった方言を用いる華人にとって、シンガポールにおける方言集団の社会的、経済的、文化的な中心地であった。このようなアーバン・ヴィレッジは、連鎖移動<sup>51)</sup>により、さらに同一方言集団の移民を吸収し、地域的集中を助長させた。

#### Ⅳ-3. 華人方言集団の経済活動

つぎに、華人方言集団の経済活動を居住パターンとの関連に着目しながら考察しよう。華人の経済活動をみると、ある方言集団が特定の経済活動分野に集中して従事する傾向が、非常に顕著であった<sup>52)</sup>。同業会館の多くは、その名称に福建、潮州などの方言集団名あるいは地域名を掲げていない場合でも、実際には、その構成員のほとんどすべて、あるいはその大半が、特定の方言集団に属する者である場合が多かった<sup>53)</sup>。それでは、各方言集団の経済活動の特色を検討しよう。

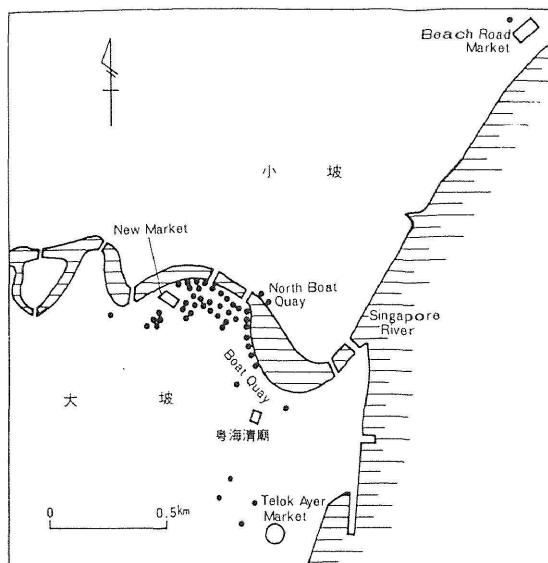
福建人は、開港以来最大の方言集団であっただけでなく、経済力の点においても、華人方言集団内で最大であった。開港直後、シンガポールの貿易を事実上独占していたのは、マラッカから移って来た福建人であった。福建人が集中居住した Telok Ayer Street は、当時海岸に面していたが、その地区は貿易にとって有利な位置であった<sup>54)</sup>。マレー半島のゴム産業の発展も、福建人の手によるもの

が多かった。華人が設立した銀行の中には、福建人が創設したものが多かった<sup>55)</sup>。福建人は、中国、マレー半島、ボルネオ、ジャワなどの周辺地域との貿易に多く従事し、貿易、船舶、金融など経済活動の中枢の実権を握っていた。福建人のアーバン・ヴィレッジは、シンガポールの経済活動の中心地であった。

開港以来、福建人に次ぐ経済力を有してきたのは、潮州人であった。たとえば設立以来の中華総商会（1906年設立、1914年以前は中華商務商会と称した）の1940年までの22期の正会長のうち、福建人が12期、潮州人が8期、広東人が2期を勤めた。

また副会長の場合、福建人と潮州人が、ともに10期を勤め、広東人が2期を勤めた<sup>56)</sup>。1907年には、潮州人によって四海通銀行が設立された。潮州人も福建人と同様、貿易に多く従事した。潮州人の貿易の特色は、ガンビール、コショウ、海産物、野菜・果物、米などのシンガポールおよび周辺の東南アジア各地の物産の取引にあった。とくに、潮州人が華人社会の最大方言集団であるタイからの米の輸入・販売は、潮州人の専門であった。貨物船で運ばれて来たタイ産米は、*tong kang* とよばれるはしけに積み換えられて、シンガポール川の河岸にある米倉庫に納められた。第8図は、1940年頃の米の輸入販売業者の分布を示したものである。米の輸入販売業者の大部分は、シンガポール川の南岸に集中していることがわかる。この地区は、潮州人のアーバン・ヴィレッジである。また、潮州人は、魚や野菜、卵などの生鮮食料品の卸・小売においても活躍したが、シンガポール川に近い New Market 周辺は、生鮮食料品の市場となっていた。潮州人がシンガポール川の河岸近くに多く集中しているのは、彼らの生業が、シンガポールの水運を利用したことが多いことと関連があると思われる。

広東人は、人口規模において、潮州人とほとんど同じか、それより大きかった（1901年以降）が、経済力の面では、福建人や潮州人とは、大きな開きがあった。広東人は、飲食業、旅館業、貴金属業、簾細工業、建築・木工業、時計修理業、機械・金属業、レンガ製造業などに多く従事し、貿易や金融などの経済の中枢をになう分野での活躍はあまりみられなかった。福建人や潮州人に比べて、広東人は資本力が相対的に劣り、上記のような小資本で経営可能な職人的な職種や個人経営に集中した。ただし、シンガポール最初の華人系銀行である広益銀行（1903年設立、1913年閉鎖）は、広東人の創設であった<sup>57)</sup>。上述したような広東人の経済活動は、水運の便のよさが求められる福建人と潮州人の経済活動とは異なっていた。広東人のアーバン・ヴィレッジが、やや内陸側に形成されたのも、



第8図 米の輸入販売業者の分布（1940年頃）（1点1業者）

資料：関楚璞ほか編（1940）：『星洲十年』星洲日報社、シンガポール、599～603。

そのことと関係があると思われる。

つぎに、少数方言集団の経済活動をみてみよう。海南人の象徴的な職業は、従来からコーヒー店（咖啡店）の経営であった。華人にとって、コーヒー店は、一杯の安価なコーヒーを飲みながら、労働の疲れをいやし、同郷人と故郷の話をするいい場所であった。コーヒー店の経営は、労働量の割には収益が少なかった。そのため、初期の段階では、華人移民にとって、比較的容易に現金収入が得られる職業とみなされたが、しだいにある程度の資金の蓄積ができると、他の有利な職業へ移っていった。このような職業に多くの海南人が従事したのは、海南人のシンガポールへの来港が、福建人、潮州人、広東人などより遅く、その他に有利な職業が見出せなかったからである。海南人のコーヒー店経営者の同業会館である瓊僑咖啡公会は、海南人の最大の同業会館であり、1934年に北岸地区の Middle Road に近い Malabar Street に設立された。コーヒー店経営のほか、海南人は、飲食店経営<sup>58)</sup>やパン製造業に多く従事した。また、イギリス人の家庭や軍隊における使用人やコックには、海南人が多かった。

コーヒー店の経営は、はじめもっぱら海南人によって行われたが、1900年代に入ってからその分野への福州人の進出が著しくなった<sup>59)</sup>。1940年頃の状況をみると、シンガポールには1,000軒余りのコーヒー店があったが、そのうちの500軒余りは福州人が経営し、海南人が経営するコーヒー店は300軒余りであった<sup>60)</sup>。福州咖啡商公会は、1920年に南岸地区の Tanjong Pagar Road に近い Tras Street に設立された。福州人はまた、理髪業に多く従事した。1921年以前、シンガポールの理髪業は広東人がもっとも多かったが、その後興化人の理髪業従事者が増加し、そして1930年頃より、理髪業では福州人が卓越するようになった。福州人がシンガポールへ多く移住するようになったのは、1930年代になってからであるが<sup>61)</sup>、その時すでに、先來の方言集団はより有利な職業に従業していた。理髪業は、咖啡店経営と同様に、後來集団に残されていた職業の一つであったといえよう。

客家人の職業にも、いくつかの特色がみられた。質店（中国語で當舖）の経営者の多くは、客家人とくに広東省の大埔地方出身者であった。1929年の世界恐慌直前には、シンガポールに25軒の質店があったが、そのうちの22軒は大埔地方出身者の経営であった<sup>62)</sup>。また、漢方薬店の経営でも、大埔出身の客家人が卓越していた<sup>63)</sup>。このほか、靴店・貴金属店の経営や教師・医師・弁護士・政治家などの専門的知識を要する職業にも、客家人の進出が目立った。このような専門的職業は、地域的に集中する利点が少ないものであり、このことは、客家人の地域的集中を促さなかった原因の一つであろう。

興化人・福清人の職業の特色は顕著である。人力車の車夫、自転車・自動車の修理・解体業、タイヤ販売、バス・タクシー会社の経営およびそれらの運転手など、交通・運輸の関連分野に多く従事した<sup>64)</sup>。開港以来のシンガポールの重要な交通手段は馬車であったが、1880年に上海から人力車（「東洋手車」とよばれたが、東洋は日本を指す）が導入されると、急速に普及した<sup>65)</sup>。興化人と福清人は、他の多くの集団より遅れて、1880年代以降シンガポールに來住した。その時、先來集団は、すでにしっかりした経済基盤をつくり上げていたが、興化人と福清人は、新しい交通手段である人力車を生業の対象とした。今世紀初め、ひとりの興化人がクアラ・ルンブルで自転車業を始めて、成功したが、

それに続いてシンガポールでも福清人や興化人の中に自転車業に従事する者が増加した。その後、自転車は自動車に発展し、それと同時にそれらの部品やタイヤを取り扱う商売を始める者が現われてきた。そして、植民地政府によって公共バスの導入が提唱されると、それに応じて、興化人と福清人は、バス交通へも進出した<sup>66)</sup>。バスの主要ターミナルは、北岸地区の興化人と福清人の集中地区におかれた。

三江人のなかでも、中心的な存在であったのは上海地方出身者であったが、上海人の同業会館としては、1939年に上海西式女服同業会（西式とは洋式の意）が設立された。また、浙江省の温州出身者は木器業に<sup>67)</sup>、湖南省の永興出身者は、北岸地区の Jalan Sultan 一帯で冶金業に、また湖北省の天門出身者は歯科医業に多く従事した<sup>68)</sup>。いずれも、先駆的な同郷人の成功があったからである。

以上みてきたように、華人方言集団の経済活動には、特定分野における特定の方言集団の卓越と専門化の傾向がみられた。このことは、特定の方言集団の地域的集中を強める結果となった。

## V む す び

東南アジアの都市の居住パターン的一端を明らかにすることを念頭において、本研究では、華人を中心に形成されてきたシンガポールの都市の事例を検討した。華人社会は多様な方言集団から構成されているが、華人の居住パターンの考察においても、この点に着目した。そして、1819年の開港から第二次世界大戦に至るまでの華人方言集団の居住パターンを、華人会館および廟の分布を通して明らかにし、そのような居住パターンが形成された背景について考察を行った。

シンガポールの華人方言集団は、福建人、潮州人および広東人の三大方言集団と、海南人、客家人、福州人、興化人、福清人などの少数方言集団から構成されてきた。この中で、福建人は、開港以来、シンガポール華人社会の最大の方言集団であった。

華人の居住は、まずシンガポール川南岸の、ラッフルズの都市計画で華人居住区に指定された地区から始まった。そこには、福建人、潮州人、広東人および客家人の会館や廟が形成された。三大方言集団は、南岸地区を大きく三つの地区にすみわけた。そのことは、それらの集団の会館の分布からも明らかである。少数方言集団の中では、もっとも早く来港した客家人も、南岸地区に居住したため、明瞭な集中地区は認められなかった。

一方、上記の集団より遅れて移住してきた海南人、福州人、興化人、福清人などがおもに居住したのは、開港初期の都市計画でヨーロッパ人居住区に割り当てられていた北岸地区であった。とくに海南人は、Middle Road 一帯に明瞭な集中地区を形成した。このように、華人方言集団の居住パターンは、シンガポール川をはさみ、南岸地区と北岸地区で著しい対照を示した。

華人方言集団間の方言の違いによるコミュニケーションの困難、思考様式や生活様式などの差異、イギリス植民地政府の対華人政策などは、華人方言集団の居住パターン形成の基本的な条件であった。そのほか、華人方言集団の居住パターンの形成には、次のような背景があったと考えられる。

開港直後に移住してきた福建人、潮州人および広東人の多数方言集団は、社会経済的条件に恵まれた、ラッフルズの都市計画で華人居住区に指定された地区に、いち早く住みついた。これに対し、後

来の少数方言集団である海南人、福州人、興化人、福清人などは、結果的に、新しい華人集落が形成された北岸地区に居住せねばならなかった。このように、華人方言集団の移住の時期と移住の規模の差異は、集団の初期の居住地の選定に大きな影響を与えた。また、華人の移住に際しては、移民の募集からシンガポール到着まで、客頭、客棧、猪仔館など、同一方言集団に属する者が、特定の地区に集中しやすいシステムになっていた。

華人移民は、新しい環境へ適応するためのクッションの役割を果たすアーバン・ヴィレッジを、それぞれの方言集団ごとに形成した。そこには、各種の華人会館や廟をはじめとする方言集団のさまざまな施設が集中し、シンガポールにおける各方言集団の社会的、文化的および経済的な中心地であった。このようなアーバン・ヴィレッジの形成は、方言集団の新しい移住者を吸引し、地域的集中を助長させた。

つぎに、華人の経済活動を、各方言集団ごとに検討した。貿易、金融などのシンガポール経済の中核を掌握していたのは、福建人と潮州人であった。また、福建人と潮州人の生業は、水運の便と関連があるものが多く、彼らは海岸に近い Telok Ayer Street 一帯やシンガポール川の河岸近くに集中居住した。前者二集団より経済力が相対的に劣っていた広東人は、福建人や潮州人の集中地区よりもやや内陸側の Kreta Ayer 周辺に集中して居住した。海南人と福州人はコーヒー店の経営で卓越し、質店や漢方薬店の経営、および専門的能力を必要とする職業では、客家人が活躍した。興化人と福清人の職業は、交通・運輸関係に集中した。このように、先来の多数方言集団は、いち早く有利な職業とそれに適した居住地を選択した。一方、後来の少数方言集団は、いわば彼らに残された職業の中からみずからの職業を選ばざるを得なかった。上述したような特定の職業分野での特定の華人方言集団の卓越は、方言集団の地域的集中を強める要因ともなった。

以上考察してきたような華人方言集団の居住パターンは、第二次世界大戦後、とりわけ1965年のマレーシアからのシンガポールの分離独立後、華人をとりまく社会経済的環境の大きな変化<sup>69)</sup>に対して、大きく変容してきた<sup>70)</sup>。第二次世界大戦後の華人方言集団の居住パターンについての考察は、別の機会に論ずることにする。

本研究は、1978年11月から1980年11月まで、筆者が文部省アジア諸国派遣留学生として、シンガポールの南洋大学地理学系留学中に行ったものである。黎経富博士 (Dr. Loy Keng Foo) をはじめとする南洋大学 (現シンガポール国立大学) 地理学系の先生方、同大学社会学および心理学プログラムの宋明順 (Sung Ming Shuen) (現台湾師範大学教授) からは、貴重な助言をいただいた。鍾臨傑博士 (Dr. Cheng Lim Keak) は、貴重な博士論文の閲覧を筆者に許された。

また、山本正三先生、奥野隆史先生をはじめとする筑波大学地球科学系の多くの先生方、および東洋大学の太田勇先生からは、多大の御教示をいただいた。現地調査では、潮州八邑会館の潘醒農氏をはじめ、多くの華人会館および廟の皆様御協力を得た。製図の一部は、筑波大学地球科学系の宮坂和人技官に依頼した。以上、記して深く感謝申し上げる。



## 注・参考文献

- 1) McGee, T. G. (1967): *The Southeast Asian city: a social geography of the primate cities of Southeast Asia*. G. Bell and Sons, LTD., London, 139~154.
- 2) Sidhu, M. S. (1976): Chinese dominance of West Malaysian towns, 1921-1970. *Geography*, 61-1, 17~23. Niew, S. T. (1971): The distribution pattern of Chinese population in Malaysia, Singapore and Brunei. *Journal of Southeast Asian Researches*, 7, 95~125.
- 3) McGee, T. G. (1971): *The urbanization process in the third world*. G. Bell and Sons, LTD., London, 121~148.
- 4) Jackson, J. C. (1975): The Chinatowns of Southeast Asia: traditional components of the city's central area. *Pacific Viewpoint*, 16-1, 45~77.
- 5) McTaggart, W. D. (1966): The grating of social areas in Georgetown, Penang. *The Journal of Tropical Geography*, 23, 40~46.
- 6) 筆者は、先に横浜中華街における華人の居住パターンと華人の生活様式について考察した。山下清海 (1979): 横浜中華街在留中国人の生活様式。人文地理, 34-4, 321~348.
- 7) 都市内部の華人民間集団の居住パターンの考察ではないが、東マレーシアのサラワク州全域における華人の居住パターンの形成においても、各方言集団間に大きな差異が認められた。山下清海 (1982): 東マレーシア・サラワクにおける華人民間集団の居住パターンの形成。地学雑誌, 91-5, 332~353.
- 8) Hodder, B. W. (1953): Racial groupings in Singapore. *The Malayan Journal of Tropical Geography*, 1, 25~36.
- 9) Cheng, L. K. (1979): *The Chinese in Singapore: their socio-economic geography, with special reference to Pang structure*. An unpublished dissertation, Univ. of London for the Ph. D. degree, 433p.
- 10) 本研究は、開港から今日に至るまでの華人民間集団の居住パターンの形成と変容に関する研究の一部をなすものであり、その研究全体のアウトラインについては、すでに報告した。山下清海 (1981): シンガポールにおける華人民間集団のすみわけ。日本地理学会予稿集, 20, 196~197.
- 11) シンガポールの多くの華人会館は、会館の創立記念などに、特別出版物（一般に『記念特刊』とよばれる）を発行してきた。その中には、その会館の略史、会館の位置の変遷、会員の動向・活動状況、関連の深い会館の紹介などの記述がある。これら『記念特刊』類のほかに、会館・廟の位置の変遷の確認において、参考にしたおもな文献は、下記のものである。呉華 (1975): 『新加坡華族会館志第一冊』南洋学会, シンガポール, 199p. 呉華 (1975): 『新加坡華族会館志第二冊』南洋学会, シンガポール, 221p. 呉華 (1977): 『新加坡華族会館志第三冊』南洋学会, シンガポール, 186p. 林孝勝ほか (1975): 石叻古蹟, 南洋学会, シンガポール, 261p.
- 12) 1980年の人口センサスによれば、シンガポールの総人口241万人のうち、華人が76.9%を占め、以下マレー人が14.6%, インド人が6.4%の順であった。
- 13) 大西青二 (1980): 初期シンガポールの人口。徳島大学教養部紀要 (人文・社会科学), 15, 1~22.
- 14) Saw, S. H. (1970): *Singapore: population in transition*. Univ. of Pennsylvania Press, Philadelphia, 42~45.
- 15) 張礼千 (1941): 新加坡人口之演進。南洋學報, 2-1, 115~125.
- 16) Farrest, R. A. D. (1965): The southern dialects of Chinese. Purcell, V.: *The Chinese in Southeast Asia*. Oxford University Press, Second edition, London, 569~571. 中国南部の方言は、広東系、福建系、客家系に大きく区分できるが、それらはさらにいくつかの系統に分けられる。
- 17) 林孝勝 (1975): 十九世紀星華社会的群権政治。林孝勝ほか: 前掲11), 1~38.
- 18) たとえば、福清人の会館の一つである江兜王氏公会は、興化人の最大の会館である興安会館の属下にある。
- 19) 「会館」は狭義の使い方では、単に同郷団体だけをさすこともある。また、同姓団体は「宗親会」、同業団体は「行会」ともよばれる。本稿では、すべての華人団体を総称して、華人会館とよぶことにする。
- 20) 恆山亭は、シンガポールで最も古い廟の一つで、1828年に、都心の西のはずれにある Silat Road の丘の上に、福建人によって創立された。
- 21) シンガポールの華人廟には、同一廟内に多くの種

- 類の神を祀っている。主神は、廟内の中央に祀ってある神をさす。たとえば、福建人が建立した天福宮の場合、主神は天后聖母であるが、主神の右には関帝、左には保生大帝が祀られ、そのほか廟内には、大爺、小爺、虎爺などが祀られている。また天后聖母を祀った棟の背後には、観世音菩薩や孔子を祀った棟がある。
- 22) ラッフルズのシンガポールの選択については、別枝篤彦(1977):『東南アジア地域研究史序説——ラッフルズの業績を中心に——』大明堂, 東京, 237~261 参照。
- 23) 信夫清三郎(1968):『ラッフルズ伝——東南アジアの帝国建設者——』平凡社, 東京, 343~358。
- 24) Purcell, V. (1948): *The Chinese in Malaya*. Oxford University Press, Oxford, 70~71。
- 25) ブギス(Bugis)人は、現在のインドネシアのセラウェシ(セレベス)島を中心に居住した民族で、古くから航海術にすぐれ、東南アジア島嶼部の交易で活躍した。海賊や奴隷商人としての悪名も高かったイスラム教徒であった。
- 26) ラッフルズの都市計画の詳細については、大西青二(1971):『ラッフルズのシンガポール都市建設について』織田武雄先生退官記念会編:『人文地理学論叢』柳原書店, 京都, 703~713 参照。
- 27) 信夫清三郎(1968):前掲23), 366~369。
- 28) シンガポールの都市中心部は、シンガポール川をはさんで、南岸地区は大坡 *Da po*、北岸地区は小坡 *Xiao po* と、華人からよばれてきた。欧米系の学者の中には、南岸地区の華人集中地区を Old Chinatown、北岸地区のそれを New Chinatown とよぶ者もある。
- 29) 柯木林(1975):古色古香的天福宮。林孝勝ほか:前掲11), 47~56。
- 30) 李奕志(1975):従海唇福德祠到緑野亭。林孝勝ほか:前掲11):197~206。
- 31) 黄富榮・謝品鋒(1963):新加坡店和館史略。南洋文摘, 4—8, 43~45。
- 32) 吳華(1975):粵海清廟話旧。林孝勝ほか:前掲11):148~152。
- 33) 潘醒農(1950):新加坡潮僑概況。潘醒農編:『馬來亞潮僑通鑑』南島出版社, シンガポール, 39~41。
- 34) Song, O. S. (1923): *One hundred years' history of the Chinese in Singapore*. John Murray, London. Reprinted from University Malay Press, Singapore, 1967. 19~20。
- 35) 黄成仁(1970):新加坡的甘蜜和胡椒種植業。新社季刊, 3—1, 31~36。Lee, P. P. (1978): *Chinese society in nineteenth century, Singapore*. Oxford University Press, Kuala Lumpur 27~36。
- 36) 潘醒農(1950):前掲33), 39~41。
- 37) 張清江(1975):行業色彩濃厚的庇福古廟。林孝勝ほか:前掲11), 153~162。
- 38) 滿鉄東亜經濟調査局(1941):『英領馬來、緬甸及濠州に於ける華僑』滿鉄東亜經濟調査局, 東京, p.61。
- 39) 崔貴強(1977):『星馬史論叢』南洋学会, シンガポール, 24~40。
- 40) 新加坡瓊州會館(1965):『瓊州會館瓊州天后宮大廈落成紀念特刊』シンガポール, p. 65。
- 41) 新加坡符氏社(1969):『新加坡符氏社慶祝八十週年紀念特刊』シンガポール, p. 12。
- 42) 南洋大學歴史学系(1970):『新加坡華族行業史調査報告(1)福州人興理髮業1911—1970』南洋大學歴史学系, シンガポール, p. 15。
- 43) 三江人とは、本来上海を中心とする揚子江下流域の浙江、江蘇、湖北、湖南などの各省出身者をさしたが、シンガポールでは、福建、広東兩省以外の出身者のほとんどを三江人とよび、華北地方出身者もこれに含まれる。
- 44) 陳升桂(1976):新加坡瓊州人工商業概況。陳升桂編:『新加坡共和國瓊人工業志第二輯』シンガポール, 51~52。
- 45) 東亜同文會編(1920):『支那省別全誌 第14卷福建省』東亜同文會, 東京, 18~31。
- 46) 李鍾鈺(1969):八十二年前的星洲。南洋文摘, 10—11, 769~770。
- 47) 新加坡晉江會館(1978):『新加坡晉江會館六十週年紀念特刊』シンガポール, 635~640。
- 48) Jones, E. and J. Eyles (1977): *An introduction to social geography*. Oxford University Press, London, p. 177。
- 49) Gans, H. J. (1962): *The urban villagers: group and class in the life of Italian-Americans*. The Free Press, New York, 367p。
- 50) シンガポールにおける信局の起源や内容については、柯木林(1972):新加坡僑滙与民信業研究。柯木林・吳振強編:『新加坡華族史論集』南洋大學卒業生協會, シンガポール, 159~210。
- 51) 人口の移動において、一度その場所から来た人の小さな核ができると、移動量は増加する傾向があり、このことは連鎖移動(chain migration)とよばれる。デヴィッド・M・ヘアー著、黒田俊夫訳(1976):『人

- 口の社会学』至誠堂、東京、p.106.
- 52) Cheng, L. K. (1978): Pang trade specialization in Singapore. *Review of Southeast Asian Studies*, 8, 1~23.
- 53) たとえば、米商公局および魚商公局は潮州人によって、北城行(土建業者の団体)は広東人によって、當商公会(質店の団体)は客家人によって、自由車商會は興化人によって、事實上構成されていた。
- 54) Cheng, L. K. (1978): 前掲52), p. 3.
- 55) たとえば、華商銀行(1912年設立)、和豐銀行(1917年設立)、華僑銀行(1919年設立)、華僑銀行(前の華僑銀行、華商銀行、和豐銀行が合併して1932年に設立)、大華銀行(1935年設立)。
- 范叔欽(1969):『新加坡經濟』友聯書局、シンガポール、98~125. 游仲勳(1976):『華僑政治經濟論』東洋經濟新報社、東京、108~121.
- 56) 陳維龍(1969):新加坡中華總商會今昔觀。新社季刊、2-1, 17~19.
- 57) 范叔欽(1969):前掲55), 98~125.
- 58) シンガポールでは、海南式チキンライス(海南鶏飯)は、非常に人気のある料理である。
- 59) コーヒー店経営者の海南人から福州人への移行は、シンガポールだけでなく、マレーシアやブルネイにおいても、同様な傾向がみられる。韓鉄豊(1973):沙巴海南人職業型式之演變。南洋學報、28-1・2, 崔貴強・古鴻延編(1978):『東南亞華人問題之研究』教育出版社、シンガポール、101~121に再録。
- 60) 閔楚璞ほか編(1940):『星洲十年』星洲日報社、シンガポール、638~639.
- 61) 南洋大学歴史学系(1970):前掲42), 1~20.
- 62) 閔楚璞ほか編(1940):前掲60), p. 633.
- 63) 閔楚璞ほか編(1940):前掲60), 603~606.
- 64) 南洋大学歴史学系(1971):『新加坡華族行業史調査報告(4)興化人と交通業』南洋大学歴史学系、シンガポール、83p.
- 65) 曾鉄忱(1975):『新加坡史話』黎明文化事業股份有限公司、台北、258~263.
- 66) 嚴仁山(1972):郡人事業發展史概述。新加坡興安會館:『新加坡興安會館五十週年紀念特刊』p. 34.
- 67) 南洋大学歴史学系(1970):『新加坡華族行業史調査報告(2)温州人と木器業』南洋大学歴史学系、シンガポール、91p.
- 68) 新加坡兩湖會館編(1967):『新加坡兩湖會館慶祝二十週年紀念特刊』p. 43. 兩湖とは、湖北省と湖南省の両方をさす。
- 69) 山下清海(1980):急変するシンガポール華人社會——言語、教育を中心として——。アジア文化、5, 76~82.
- 70) 太田 勇(1976):シンガポール・ジョロン工業団地の民族集団。地理学評論、49-12, 765~779.

## The Residential Pattern of Chinese Dialect Groups in Singapore prior to World War II

Kiyomi YAMASHITA

Since the opening of Singapore's port in 1819, a prime area of British colonies in Southeast Asia, Singapore has received many immigrants from China (Table 1). Singapore's population in 1980 is 2,413,945, 76.9% of whom are Chinese. The Chinese are forming communities of various dialects. Hokkiens have been the majority group since the opening of the port of Singapore (Fig. 1 and Fig. 2). It has been recognized that the Chinese people tend to live in an area populated by people that speak their own dialect. Consequently, this trend has formed a unique residential pattern of Chinese dialect groups.

This paper is presented as part of a series of this author's research on Chinese dialect groups' residential pattern in Singapore. In this paper, the author's intentions are to identify the residential pattern and examine the background of its formation. Previous

statistical data pertaining to the distribution of the Chinese dialect groups in Singapore were limited. Records were collected about distribution of the Chinese dialect groups through field surveys of associations and temples of the Chinese dialect groups (Table 2 and Table 3). In order to grasp the residential pattern, the associations and temples were classified by their members' dialect, and maps of their distribution in each era were prepared (Fig. 4, Fig. 5 and Fig. 6).

The metropolitan area of Singapore is divided into two districts separated by the Singapore River: the south bank (*Da po*) and the north bank (*Xiao po*). The settlement of Chinese immigrants had started in the south bank district which was allocated to them according to a city development plan made right after the opening of the port. The south bank district is located near the port and has been a center of economic activity. Hokkiens, Teochews and Cantonese had settled there first and these three groups formed three separate areas of residence. On the other hand, other minority groups except the Hakkas arrived later and started to settle in the north bank district which was once allocated to the European people. These minority groups and the three majority groups were distributed in a mosaic fashion throughout the north bank district.

There are several factors which can be attributed to the formation of the Chinese dialect groups' residential pattern before World War II.

The differences among the dialects were so large that it was difficult to communicate with others using a different dialect. Most of the immigrants who immigrated as coolies did not receive sufficient education and as a result this made it even harder for them to understand other dialect groups.

The majority groups such as the Hokkiens, Teochews and Cantonese arrived right after Singapore opened its port. The minority groups such as Hainanese, Foochow and Henghuas arrived relatively late. The majority groups having arrived earlier could settle in the south bank district, the center of economic and social activities. However, the later minority groups had to find residence elsewhere.

The new immigrants who arrived in Singapore due to a chain migration needed an urban village (Gans, 1962) which would serve as a cushion for the adjustment to a new environment. In an urban village, there were various organizations founded and attended by people speaking the same dialect such as temples, lodging facilities, remittance facilities (Fig. 7) and schools. These urban villages became the core of the dialect groups' habitation and helped them form a unique residential pattern.

In the Chinese business activities, the Chinese dialect groups had a tendency to specialize and dominate certain trades. This tendency was one of the major factors that promoted areal concentration of Chinese dialect groups. Occupational segregation and residential segregation of Chinese dialect groups had been interactive, and had formed the residential pattern of the Chinese dialect groups.

The residential pattern of the Chinese dialect groups which was formed before World War II has been changing rapidly, especially since 1965 when Singapore became independent. As the socio-economic environment of Singapore has changed, the residential pattern of the Chinese dialect groups has also changed. This theme is the subject for a future study.





写真 1. シンガポール川の河口 (1979.10.20)

シンガポール川の水運が利用できるため、河岸(とくに南岸)付近には、1819年の開港直後から、貿易やその他の商業に携わる潮州人が多く居住し、潮州人集中地区を形成した。対岸の家並みが見える地区はBoat Quayで、その背後には、潮州人が1820年代に創立した粵海清廟がある。今日においても、荷物を運ぶ tong kang とよばれる小舟が、忙しく行き交う光景がみられる。



写真 2. Telok Ayer Street の福建会館 (1979.7.28)

福建会館は、1860年頃創立されたが、この建物は、1955年に建てられたもの。会館の内部は、子弟の教育を行う学校になっている。Telok Ayer Street は、開港直後のメイン・ストリートであり、1820年代には、すでにいくつかの会館や廟が設立された。Telok Ayer Street 周辺は、福建人集中地区であり、通りをはさんで、福建会館の向かえには、福建人が創立した由緒ある天福宮がある。



写真 3. 広東人集中地区, Kreta Ayer (牛車水) (1980.9.1)

シンガポールでチャイナタウンといえば、一般にこの地区をさすことが多い。第二次世界大戦前は、周辺に劇場や娯館があり、歓楽街でもあった。3階あるいは4階建てのショップハウス(中国語で店屋)とよばれる店舗兼用住宅が軒をつらね、人口密度が高い。すでに建物の老朽化が著しく、半ばスラム化している。通りには露店が並び、住民のほとんどは広東人で、広東語がこの地区の共通語である。





写真 4. 広東人の同郷会館,  
Ann Sian Hill

(1980.5.4)

Kreta Ayer に近い, Ann Sian Hill およびそれに続く Club Street には, 第二次世界大戦前から多数の広東人の会館が建てられてきた。花県会館も清遠会館も, 広東人の同郷会館である。華人にとって, 会館は相互扶助の重要な機関であった。

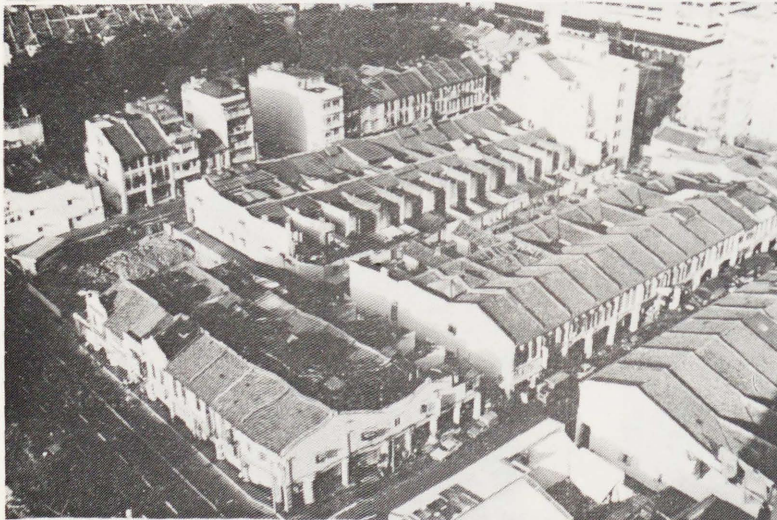


写真 5. Middle Road 付近  
の海南人集中地区

(1980.7.5)

福建人, 潮州人および広東人の三大方言集団の集中地区が, 南岸地区(大坡)に形成されたのに対し, 海南人は, 北岸地区(小坡)の Middle Road(写真の左上を斜めに走る通り)付近に集中地区を形成した。そのことは, 街路名にも反映され, Middle Road は海南一街, Purvis Street(写真の右下を斜めに走る通り)は海南二街, Seah Street は海南三街とよばれる。瓊州会館もこの一角にある。



写真 6. 北岸地区のショップ  
ハウス (1980.7.5)

写真は, Queen Street と Albert Street の交界付近のショップハウスで, 1928年に建設されたもの。1階が商店で, 2階と3階は居住部分となっている。ショップハウスは, 東南アジアの都市において一般的に見られる伝統的な居住形態である。この付近には福州人, 興化人, 福清人などが多く居住していた。